

違いに寛容な感性を育み、 社会を変える

マセソン 美季

スポーツと教育の力で、社会をより良いものに変えていくため、国内外の教育現場を訪れてきた。目指すのは「インクルーシブな社会」。誰も取り残されることなく、多様な人々に活躍の機会や場が与えられ、より多くの人たちの生活を、よりポジティブなものに変えていくための考え方や、受け皿が整っている社会だ。

パラリンピックは、インクルーシブな社会を実現させるために必要なアイデアの宝庫であることをご存知だろうか。多様なアスリートたちが公平に競い合えるよう、用具やルール、サポートの仕方など、さまざまな工夫が散りばめられている。違いに寛容な価値観がベースにあり、受け皿が備わっているから、選手たちは最大限の可能性に挑戦できる。そして、周りの人たちに無理だと思われたことも、考え方をえたり、少し工夫したりすれば、たった一つの「・」（アポストロフィ）を加えるだけで不可能 (impossible) は、“I’m POSSIBLE”（「私は、できる」という意味の造語）という全く逆の結果に変えることができることを教えてくれる。

競技場で輝いていた選手たちが、社会の中でも居場所や活躍の機会を見つけれられているかといえば、残念ながらそうではない。施設が整っていない、前例がない。さまざまな理由で学びや就職の機会等が剥奪されてしまっている。社会の中で生きづらさを感じているのは、障がいのある人に限ったことではない。少しでも人と異なるニーズがある人たちは、不便や不利を強いられているのである。

あらゆる人が活躍できるような機会を見つけるためには、さまざまな才能を評価する多極的な評価軸が必要になる。あらゆる人に活躍の場を提供するためには、千差万別なニーズに備える多角的な視点と柔軟な発想、違いを包容する力が不可欠だ。私たちが暮らす社会は、違いに対してどれだけ寛容だろうか？自分と異なるニーズのある人のことを知る機会を意図的に設け、常識を疑う癖をつけ、優劣ではなく違いに寛容な感性を醸成する学びの場を増やし、社会を変えていきたい。



PROFILE

ませそんみき：1973年生まれ。東京都出身。（公財）日本財団パラリンピックサポートセンター推進戦略部プロジェクトマネージャー。スポーツと教育の力でインクルーシブな社会の実現を目指し、奔走中。2018年3月より国際パラリンピック委員会、同年8月より国際オリンピック委員会の教育委員メンバーに就任。1998長野パラリンピック競技大会アイススレッジスピードレース競技では、日本代表選手として金メダル獲得。カナダ在住。